

【消費者問題講義の実践モデル】

専門教育の消費者問題講義

第1回 イン트로ダクション（2020/10/1（木）福田進治）

(1) 講義の目的と概要

専門教育の消費者問題講義は、教養教育の消費者問題講義を受講した受講生が、続けてこの講義を受講し、消費者市民社会の形成に関わるさまざまな問題をより深く、専門的・実践的に学ぶことを想定して構成されている。しかし、実際は、この講義の受講生は教養教育の講義を受講していないケースが多いため、最初に、消費者の生活や行動に関わるさまざまな問題の所在を確認しておく必要がある。また、消費者問題を専門的・実践的に学ぶための準備として、消費者問題の枠組みを理解しておくことが必須であろう。

そこで、第1回の講義では、教養教育の消費者問題講義と同様に、消費者問題の概要と枠組みについて学ぶ。すなわち、いわゆる消費者問題が、消費者契約をめぐる問題（消費者トラブルの問題）、消費者の行動をめぐる問題（消費者市民社会の形成）、事業者の行動をめぐる問題（消費者志向経営の推進）などからなることを理解する。そして、2012年の消費者教育推進法の施行以降、それらの問題に対する取り組みが活発化していること、そうした取り組みの一環としてこの講義が開講されていることを理解する。

最後に、消費者問題講義全体の教育効果を分析するために、事前アンケートを実施し、受講生に回答を依頼する。

(2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	この講義の科目名、担当者、講義の進め方、カリキュラム上の位置づけなど、基本的な事項について確認した上で、講義の目的と内容について確認し、消費者問題を学ぶことの必要性を理解する。	
消費者問題の概要に関する説明 (30分)	広義の消費者問題の概要として、「消費者トラブル」、「消費者市民社会」、「消費者志向経営」という言葉とその意味について学ぶ。その上で、消費者と、事業者・社会環境・自然環境などの間の相互依存関係を認識するとともに、消費者市民社会の形成に主体的に参画することの重要性を理解する。	
消費者問題の取り組みに関する説明	2012年の消費者教育推進法の施行以降の国や自治体による取り組みを学んだ上で、そうした動きと連携しながら、本学が消費者問題講義を開講したり、消費者	

## II 消費者問題講義の実践モデル

(15分)	フォーラムの開催したりするなど、取り組みをすすめてきたことを理解する。	
講義の形式的な事柄に関する説明 (15分)	今後の予定、講義の方法、教科書・参考書の有無、成績評価の方法、問い合わせ先（オフィスアワー）など、この講義の形式的な事柄について説明を受ける。	
質疑応答とコメント作成 (20分)	講義の内容を振り返り、質疑応答を行う。最後に、本日の講義のコメントを作成するとともに、講義全体の事前アンケートに回答する。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

この講義の受講生は、高等学校の課程までに消費者問題を十分に学んでいないケースが多く、かつ、教養教育の消費者問題講義を受講していないケースが多いため、この講義の第1回の内容は、教養教育の講義の第1回の内容と大きく異ならない。講義の内容は十分に受講生に伝わっており、この講義のイントロダクションとしては役割を果たしていると考えられるが、教養教育の講義とは目的や進め方が異なるため、両者の内容をもう少し差別化することも検討するべきかもしれない。

また、この講義は少人数教育のメリットを活かし、グループワークを中心に進めていくことを想定しているが、2020年度は想定よりも受講者数が少なかった。例年、特設講義の開講であるために受講生の選択に制約があるが、本年度は新型コロナ感染拡大が影響したことも考えられる（実習型の講義を敬遠する向きがあったのか、また、教養教育課程の消費者問題講義から続けてこの講義を受講する流れが作れなかったのか）。少人数教育とはいえ、ある程度の受講者数があった方が受講生の取り組みも活発化すると考えられるので、今後、受講生を確保するための工夫も必要になるかもしれない。

## 第2回 消費者問題と消費者市民社会（2020/10/8（木）福田進治）

### (1) 講義の目的と概要

戦後日本の消費者政策の変遷を振り返ると、消費者の利益や権利を保護する政策に始まり、次第に消費者自身の役割を重視する政策へのシフトが進み、消費者の主体的な行動を支援する政策の本格的な展開に至ったことが分かる。それらの帰結が、今日の消費者市民社会の形成または消費者教育の推進という課題である。こうした政策の変遷を知った上で、消費者問題や消費者市民社会について学ぶことは、今日の消費者問題の状況をより深く理解し、消費者問題を専門的に学習し、実践的な取り組みにつなげていくために不可欠であると考えられる。

そこで、第2回の講義では、消費者政策の変遷を含めて、戦後日本の消費者問題の歴史を学び、消費者政策が消費者を保護する政策から、公正な競争を実現する政策、消費者の

行動を支援する政策にシフトしてきたことを理解する。その上で、消費者の権利、消費者の責務、公正な競争、消費者市民社会、消費者教育といった消費者問題の基本的概念について学ぶ。また、国、青森県、弘前市の消費者行政のしくみについて学ぶ。これらを通して、消費者問題と消費者市民社会の枠組みについて理解を深めることを目指す。

## (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	近年の消費者問題をめぐる動き、成年年齢の引き下げ、消費者市民社会の形成などの問題を確認し、実践的に消費者問題を学ぶことの必要性を理解する。	
消費者問題の歴史に関する説明 (15分)	戦後日本の消費者問題の歴史を学び、消費者政策が消費者を保護する政策から、公正な競争を実現するための政策を経て、消費者の主体的な行動を支援する政策にシフトしてきたことを理解するとともに、消費者問題に関わる今日的な課題意識を身に付ける。	レジメを配布して説明する。
消費者問題の基本概念に関する説明 (30分)	消費者の権利と消費者の責務を学び、消費者の行動のあり方について考えるとともに、公正な競争と不公正な競争の違いを学び、公正な競争が成立するための条件を考える。その上で、消費者教育推進法の条文を読みながら、消費者市民社会の形成、消費者教育の推進という課題を理解する。	レジメと資料を配布して説明する。
消費者行政のしくみに関する説明 (15分)	国、青森県、弘前市の消費者行政のしくみについて学び、国の役割を理解するとともに、地元自治体やNPO法人（青森県消費者協会）の役割を理解する。	レジメを配布して説明する。
質疑応答と小レポート作成 (20分)	講義の内容を振り返り、質疑応答を行う。最後に、講義を受けて学んだ事柄を小レポートの形にまとめる。	

## (3) 講義の成果と今後の課題

専門教育の消費者問題講義では、講義の後半で実践的な取り組みのために時間を確保するため、基本的な内容を学ぶための時間が限られている。そのため、第2回の講義も若干内容を詰め込みすぎている感が否めないが、受講生はそれらの内容をしっかりと学び、理解している。受講生のコメントには、消費者市民社会について初めて学んだが、その重要性を理解した、消費者が主体的に行動する必要を理解したというものや、消費者問題を真剣に取り組んでいきたいというものも見られることから、受講生に消費者問題や消費者市民社会の重要性が伝わっていると考えられる。

とはいえ、消費者問題を初めて学ぶ受講生にとって、消費者問題の歴史や消費者問題の

## II 消費者問題講義の実践モデル

基本的概念について短い時間で正確に理解することは難しいのではないかと思われる。後の時間に予定されている消費者市民社会に関する実践的な取り組みのために、どのようにして消費者問題の基本的な内容を学ぶべきか、取捨選択の見直しを含めて、今後とも検討を続けていきたい。

### 【配付資料】

「消費者の権利と責務」（関西消費者協会）

「消費者教育推進法」（抜粋）

## 第3回 消費者志向経営とマーケティング（2020/10/15（木）保田宗良）

### （1）講義の目的と概要

前回の講義で、受講生は消費者の行動が社会に影響を与えることを学んだ。近年、「持続可能な開発目標」（SDGs）について、マスコミを通じて目にすることが多いが、SDGsを達成するためには、地球規模で社会の諸問題を考える消費者市民を増やさなければならない。消費者市民は社会を変え、消費者市民社会を実現するとともに、企業の行動を変える力を有する。他方、企業の行動も社会を変える。社会の改善を方針とする企業は、消費者志向経営を進めている。そうした経営方針を基盤としてマーケティング活動を進め、消費者市民を育成する活動を行っている。

第3回の講義では、消費者志向経営の考え方と企業による具体的な取り組みを学ぶ。消費者志向経営については、消費者関連専門家会議（ACAP）が積極的に推進している。そこで、ACAPの活動をトレースすることにより、消費者志向経営の内容を理解し、その上で、具体的な事例を取り上げながら、消費者志向経営に取り組む企業のマーケティング活動を学ぶ。これらを通して、消費者市民社会の形成、SDGsの達成のための取り組みにおける企業の活動の重要性を理解することを目指す。

### （2）講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	企業のマーケティング活動の実態と問題点に触れながら、企業の活動に注目し、消費者志向経営を学ぶことの意義を確認する。	
消費者志向経営に関する説明 (30分)	ACAPの活動を知ることを通して、消費者志向経営の定義、消費者志向経営の目的、消費者志向経営の推進のための取り組みなどを学ぶ。また、ACAPが消費者志向経営に取り組む企業に「消費者志向活動章」の表彰を行っていることなどを学ぶ。	



消費者志向経営に取り組む企業の紹介① (15分)	ACAP に表彰された第一生命保険株式会社の事例を取り上げ、社員が消費者志向経営を学ぶために出張授業・研修を行っていること、出張授業で取り上げたことが学校教育の質を高めることに寄与していることなどを学ぶ。	レジメと資料を配布して説明する。
消費者志向経営に取り組む企業の紹介② (15分)	ACAP と消費者庁に表彰された花王株式会社の事例を取り上げ、社員が要介護1の経験をするため器具を装着し、要介護1の顧客の利便性を改善していることなどを学ぶ。	レジメを配布して説明する。
質疑応答と小レポート作成 (20分)	講義の内容を振り返り、質疑応答を行う。最後に、講義を受けて学んだ事柄を小レポートの形にまとめる。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

この講義では、受講生は企業のマーケティング活動が生み出す問題と消費者志向経営の重要性を主として学んだ。講義終了後の受講生のコメントには、企業の発信する情報と自分の理解にはズレがあることが分かり、賢い消費者になるためには情報の本質を見なければならぬといったものや、消費者志向経営が事例を通じて理解できた、そのような優良企業に就職したいといったものが見られることから、講義の所期の目的は達成できたものと考えられる。

また、受講生は消費者志向経営の具体的事例を把握し、客観的評価を得た企業のマーケティング活動の像を明確に意識することができた。2つの客観的評価を受けた花王の活動は、消費者市民社会の形成に貢献している良き企業の事例であり、優れた経営理念を策定、実践していることが把握できた。その他にも消費者志向経営の推進やSDGsの達成に意欲的に取り組んでいる企業は多数ある。今後、受講者が自ら調べ、活動内容を学び、消費者市民社会の形成へ関心を高めていくことが望まれる。

## 第4回 多文化共生社会における消費行動（2020/10/22（木）加藤徳子）※

### (1) 講義の目的と概要

消費者市民社会の形成のためには、消費者が自身の消費行動が社会のさまざまな諸問題に影響を及ぼしていることを自覚することが必須である。しかし、多くの消費者は日常の消費行動の帰結について深く考えることはしない。自分の周りが快適で素敵で安価な衣料品や食料品などであふれているとき、そうした状態が地球の裏側の誰かの犠牲のもとに成り立っているとは思えない。ましてや、自分自身の消費行動が誰かの犠牲を生み出しているなどとは到底想像しえないのである。

第4回の講義では、児童労働の問題に焦点を当てながら、グローバル社会の中で、日本

## II 消費者問題講義の実践モデル

の消費者の生活がどのように他国の社会に影響を及ぼしているかを考える。このために、大学生たちが自分で購入しているであろう衣料品とその原料である木綿（コットン）の生産を事例として取り上げ、日本の消費者の行動とコットンの生産現場の関係を検討し、生産現場における児童労働などの社会問題を学ぶ。これらを通して、多文化共生社会であるグローバル社会の問題を理解し、自分自身の消費者としての行動を再検討する。

### (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	消費者市民社会の形成の重要性と児童労働問題を理解し、講義の趣旨を共有する。	
衣料品の生産に関わるロールプレイの実施 (30分)	グループに分かれ、衣料品のサプライチェーンに関わる人（インドの労働者の家族、コットン農園の経営者、中国の縫製業者、日本のアパレル業者の家族）を演じることを通して、さまざまな立場の人々の状況を理解し、コットンの生産現場における児童労働問題を考えるきっかけとする。	ロールプレイ教材を使用する。
コットン生産と児童労働に関するDVD教材の視聴 (15分)	DVD教材を視聴し、コットンの生産現場と児童労働問題の実態を学んだ上で、ロールプレイを通して考えた問題点を再検討し、児童労働問題に関する理解を深める。	DVD教材を視聴する。
児童労働問題に関する補足説明 (15分)	コットンの生産地であるインドの経済や社会の状況、世界の児童労働の現状、児童労働に関する国際条約などについて学び、児童労働問題の背景や取り組みについて理解を深める。	パワーポイントを用いて説明する。
質疑応答と小レポート作成 (20分)	講義の内容を振り返りながら、児童労働問題のために何ができるかを考え、意見交換・質疑応答を行う。最後に、講義を受けて学んだ事柄を小レポートの形にまとめる。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

この講義では、受講生は身近な消費財であるTシャツが自分の手元に届くまでに、たくさんの人が関わっていることを学び、その中でも児童労働などの問題を含んでいることを理解した。受講後のコメントを見ると、多くの受講生がこうした問題を考えることによって、自分たちが何気なく選択して消費している商品にも、さまざまな問題が潜んでいることに気づいたものと思われる。さらには、受講生がより深く考えながら自分自身の消費行動を変化させようと考えていることが分かる。

しかし、ファッション業界は社会の要請に応えるように変化しており、児童労働問題な

どへの取り組みも見られれば、新たな問題も見られる。社会の動きをより深く理解することが必要である。また、ファッション業界をめぐる問題は児童労働問題に限らず、衣類ロスやマイクロプラスチック問題など、さまざまな問題が存在する。多くの問題がある中でどのようにして解決策を探していくのかは難しい課題であるが、この講義もそうした課題に応えられるようなものでなければならない。

**【使用教材】**

ロールプレイ教材「このTシャツはどこからくるの？」(特定非営利活動法人 ACE)

DVD教材「このTシャツはどこからくるの？」(特定非営利活動法人 ACE)

**第5回 環境・資源問題と消費行動 (2020/10/29 (木) 加藤徳子) ※**

**(1) 講義の目的と概要**

近年、環境・資源問題の中でも、地球温暖化問題とプラスチックごみ問題への関心が高まっている。地球温暖化問題については、ヨーロッパ各国がその対策に熱心なことと対照的に、アメリカは2019年に当時の大統領がパリ協定離脱を通告するなど、問題を軽視しているように見えることから話題に尽きない。プラスチックごみ問題については、世界中の企業がそれらの削減のためにさまざまな取り組みを始めていることが話題になっている。これらの問題はいずれも地球規模の環境問題であるが、それらが私たちの消費生活と関係し合っていることも忘れてはならない。

第5回の講義では、地球温暖化問題について、地球温暖化の原因やメカニズムについて、科学的データに基づいて基本的知識を学ぶとともに、その対策をめぐる国際社会の動きを概観する。その上で、私たち日本人の消費生活との関わりについて考える。また、プラスチックごみ問題では、それらの排出量やその影響などについて学ぶとともに、世界各国や日本国内での取り組みを参考にしながら、消費者としての今後の取り組みの方向性を探る。

**(2) 講義の内容とその進行**

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	地球上にさまざまな環境・資源問題が存在することを踏まえて、自分自身の消費生活と関連づけながらそれらの問題を学ぶ必要があることを理解する。	
消費生活に関するワークシートの作成 (10分)	自分自身の普段の生活を振り返りながら、環境に良い行動と悪い行動をワークシート「私のエコ紹介」に記入し、それらを発表することによって、自分自身の生活の現状を確認する。	ワークシート「私のエコ紹介」を作成する。
地球温暖化問題に関する説	地球温暖化の原因である温室効果ガスとその発生メカニズム、その影響としての異常気象とその実情、地	パワーポイントを用いて説

## II 消費者問題講義の実践モデル

明 (25分)	球温暖化対策をめぐる国際社会の動きとその課題などを学び、温室効果ガスの抑制のために消費者として何ができるかを考える。	明する。
プラスチックごみ問題に関する (25分)	プラスチックごみの排出量や現状、自然環境に対する影響、プラスチックと私たちの暮らしとの関わり、世界各国や日本国内での取り組みを学び、プラスチックごみの削減のために消費者として何ができるかを考える。	パワーポイントを用いて説明する。
質疑応答と小レポート作成 (20分)	講義の最初に作成したワークシートを見返し、自分自身の消費生活について考えながら、意見交換・質疑応答を行う。最後に、講義を受けて学んだ事柄を小レポートの形にまとめる。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

受講生の大半は、地球温暖化問題についてすでに高等学校などで学んでいた。しかし、この問題を自分自身の消費生活と関連させて考えるような機会はあまりなかったようである。この講義を受けて、受講生は、一人一人の影響は小さくてもそれらが地球規模の集合となったときの影響の大きさを理解するとともに、地球温暖化が自分自身の消費生活に密接に関係していることを認識することができた。また、日常生活の中で安くて軽くて丈夫なプラスチックを使用することに、地球環境の悪化につながる問題が内在していたことに気づいたものと考えられる。

地球環境問題とプラスチックごみ問題は、いずれも地球規模のグローバルな環境問題であるとともに私たちの消費生活と密接に関係している重大な問題である。今後の社会を担う大学生たちに是非伝えたい問題である。講義では、それらの問題を理解するだけでなく、自分自身の消費生活の改善や社会システムの改革の提案につなげていけるように一層の工夫が必要であるように思われる。

## 第6回 食品をめぐる諸問題（2020/11/12（木）加藤徳子）

### (1) 講義の目的と概要

私たちが生きていくために「食」を欠かすことはできない。従って、食品の購入は誰もが生涯を通して続ける最も基本的な消費行動の一つである。私たち日本人は、量、質ともに豊かな食生活を送ることができるようになったが、そこには多くの問題が発生している。主要な問題として、食の安全の問題と大量の食品ロスの問題を挙げることができる。食の安全のための事業者の取り組みが重要であることは言うまでもないが、消費者自身も食品表示について正しく理解し、正しく食品を選択・消費することが必要である。また、食品ロスは私たちの消費生活の高度化にともなって生じた問題で、事業者の行動と消費者の行



動の両方に原因があるが、いずれも私たちの消費生活のあり方に関係している。

第6回の講義では、まず、食品に関わる消費者問題の実態と食品表示に関する国内の制度やルールを学び、食品を適切に選択するためのスキルを身に付ける。次に、世界と日本の食品ロス問題の現状と食品ロスを削減するためのしくみや取り組みを学び、私たちが食品ロスの削減のために、日常の消費生活の中で何を実践できるかを考える。

## (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	食品の消費をめぐるさまざまな問題があることを踏まえて、それらについて学ぶことの意義を確認する。	
食生活に関するワークシートの作成 (10分)	自分自身の普段の食生活を振り返りながら、良い点と悪い点を探してワークシート「私のエコ紹介」(食品編)に記入し、それらを発表することによって、自分自身の生活の現状を確認する。	ワークシート「私のエコ紹介」を作成する。
食の安全の問題に関する説明 (25分)	近年の食品をめぐる消費者問題を振り返るとともに、食品表示法の概要を学びながら、食品表示に関する基礎知識を身に付ける。同時に食品表示のサンプルを題材にして、食品表示の実態や問題点について考える。	パワーポイントを用いて説明する。
食品ロス問題に関する説明 (25分)	食品ロスの実態と原因について、主として国内のデータに基づいて学び、食品ロスが食品を供給するサプライチェーンと家庭における食費段階の両方に問題があることを理解し、食品ロスの削減のために必要な対策について考える。	パワーポイントを用いて説明する。
質疑応答と小レポート作成 (20分)	講義の最初に作成したワークシートを見返し、自分自身の消費生活について考えながら、意見交換・質疑応答を行う。最後に、講義を受けて学んだ事柄を小レポートの形にまとめる。	

## (3) 講義の成果と今後の課題

日常生活に欠かせない食品をめぐる問題は、受講生にとっても、最も身近で関心が高い問題の一つである。しかし、受講生が作成したワークシートの内容を見ると、食品表示について必ずしも正しく理解していないことが分かった。食品ロスについては、他の講義やメディアなどでも取り上げられており、アルバイト先などで体験して気づいた問題もあるらしく、受講生は比較的高い問題意識をもっていたが、それらを削減するための取り組みを十分に実践しているとはいえなかった。この講義は、受講生にとって、これらの問題をあらためて深く考える機会になったものと思われる。同時に、食品ロスについては、個人での取り組みには限界があり、社会全体で対策を講じていかなければならないということにも気づいたようである。

## II 消費者問題講義の実践モデル

受講生には、この講義で得た知識を活かし、食品表示を正しく読みとる力を身に付け、よりよい商品の選択につなげていくことを期待する。また、そのことが個人レベルでの食品ロス削減にもつながるものと考えられる。講義の内容としては、食の安全と食品ロスの関係をさらに掘り下げていくことも必要になるかもしれない。食品ロスに関しては、社会問題として注目されるようになってから年月も浅く、今後もさまざま場面で向き合っていく課題になるので、今後とも継続して注視していかなければならないし、講義の内容の改善にもつなげていかなければならない。

### 第7回 グループ別課題研究(1) (2020/11/19(木) 福田進治・加藤徳子)

#### (1) 講義の目的と概要

前回までの講義で、受講生は消費者問題に関する基本的知識を身に付けた上で、消費者市民社会や消費者志向経営について学び、さらに消費者市民社会の形成に関わるいくつかの具体的な問題について学んだ。これらを踏まえて、今後、受講生は3～4人のグループに別れて、主体的に個別的課題の研究に取り組み、その成果を消費者教育の実践という形で地域に還元することを目指す。

そこで、第7回の講義では、グループに分かれて、これまでの講義の内容を振り返り、意見交換をしながら、各グループの研究テーマを決定し、その概要について話し合う。そして第1段階として、課題研究の成果を用いて、弘前大学教育学部附属中学校の中学生を対象に模擬授業を行うことを目指して準備を進める。

#### (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	グループ別課題研究の目的と意義を理解し、今後の予定と今回の講義の趣旨を共有する	
研究テーマの 決定 (40分)	グループに分かれ、これまでの講義の内容を振り返り、意見交換をしながら、各グループの課題研究のテーマを決定する。また、課題研究の内容、今後の方向性、グループ内の役割分担などについて話し合う。	グループに分かれて作業を行う。
研究テーマの 発表 (20分)	グループごとに研究テーマを発表し、その内容や今後の進め方などについて意見交換を行い、グループ別の話し合いの内容を適宜修正しながら、今後の取り組みの方向性を確定する。	教室全体でディスカッションを行う。
今後の作業の 確認 (10分)	再度、グループに分かれて、今後の作業と役割分担、次回の講義までに各自で調査する内容について確認する。	グループに分かれて確認する。
コメント作成 (10分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

今回の講義で、受講生はグループに分かれて研究テーマについて話し合ったが、研究テーマは容易に決まらず、想定していた以上の時間を費やすこととなった。受講生は消費者問題や消費者市民社会についてある程度の理解に達していたが、その具体的なイメージや個人的な思いはさまざまだった。真剣に研究テーマについて話し合うことは好ましいことであるが、他方、そこであまり長い時間を使うとその後の作業に支障を来してしまう。受講生にはある程度割り切って研究テーマを決めることを求めざるを得なかった。このあたりの進め方や時間配分については今後とも検討したい。

受講生にとって、こうした課題研究の取り組みは初めてに近い経験であり、中学生を対象に模擬授業を行うことも初めての経験である。受講生の中には多少戸惑いを感じる向きもあるようだ。しかし、このような取り組みは受講生にとって多くのことを学んだり考えたりする機会となる。まずは最初の1週間で各自がどれだけの資料を収集し、次回の講義に持ち寄ることができるかが肝心であろう。今後の取り組みの中で、受講生の戸惑いが意欲に変わっていくことを期待したい。

## 第8回 グループ別課題研究(2) (2020/11/26 (木) 福田進治・加藤徳子)

### (1) 講義の目的と概要

前回に引き続き、附属中学校の中学生を対象に模擬授業を行うための準備をする。前回、受講生はグループごとに研究テーマと大まかな内容を設定した。その後、受講生はそれぞれのグループの研究テーマに沿って、個人別の調査・研究を行ってきた。今後はこれらを統合し、グループ研究の目的と具体的内容を確定していく。

こうして、第8回の講義では、グループに分かれて、各メンバーの調査・研究の結果をそれぞれのグループ内で共有し、意見交換を行いながら、研究目的を明確化し、模擬授業の構成を検討し、具体的内容を確定する。その上で、グループごとに研究目的、模擬授業の構成、具体的内容を発表し、教室全体で意見交換を行い、多様な視点や意見を取り入れながら、研究内容の理解を深める。

### (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	グループ別課題研究の進め方を理解し、今回の到達目標と今後の予定を確認する。	
研究目的と構成の検討 (40分)	グループに分かれ、各メンバーの調査・研究の結果を順次発表し、グループ内で意見交換を行いながら、研究目的を明確化し、模擬授業の構成を検討し、具体的内容を確定する。	グループに分かれて作業を行う。

## II 消費者問題講義の実践モデル

研究目的と構成の発表 (20分)	グループごとに、研究目的、模擬授業の構成、それらの具体的内容を発表し、意見交換・質疑応答を行う。そして、他のグループの受講生の多様な視点や意見を取り入れながら、研究内容の理解を深め、再検討の方向性を探る。	教室全体でディスカッションを行う。
今後の作業の確認 (10分)	再度、グループに分かれて、教室全体の意見交換を踏まえて、研究の内容について再検討した上で、今後の作業と役割分担、次回の講義までに各自で行う作業について確認する。	グループに分かれて確認する。
コメント作成 (10分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

今回の講義では、前回からの1週間で受講生が調査・研究してきた成果を踏まえて、何とかグループ研究の概要を構築することができた。しかし、今回はわずか1週間の調査・研究をまとめたにすぎないため、現時点では、不十分な箇所が少なからず残っており、内容の詳細については必ずしも判然としない部分が残された。とはいえ、模擬講義の対象となる中学生について、どのような情報に関心があるか、また理解できるかなど、聴講する側の立場にも思慮を向けて検討を進めることができた。次回までのもう1週間の受講生の取り組みに期待したい。

今回のグループワークでは、受講生同士がずいぶん打ち解けたように思えた。立場や意見が異なる者同士が話し合い、一つの目標に向かって作業を進める活動は、視野が広がり、相手の意見を尊重することにつながるなど、貴重な経験を積む機会になるように思われる。

## 第9回 消費生活フェスタ参加

(2020/11/29(日) 福田進治・保田宗良・加賀恵子・加藤徳子)

### (1) 講義の目的と概要

青森県では、毎年、「学生による消費生活フェスタ」(青森県消費者協会・大学生の消費者教育実践運営検討会議主催)が開催されている。消費生活フェスタは県内の大学の学生が集まり、学生委員会を設置し、青森県消費者協会とともに企画・運営を行うものであり、県内の大学生や高校生たちが交流を深めながら、消費者教育に関わる活動や調査研究の成果を発表するというものである。学生委員会には弘前大学の学生も参加している。

第9回の講義では、大学のキャンパス内の講義に代えて、消費生活フェスタに参加し、他大学の学生や高校生たちと交流しながら、さまざまな消費者教育活動や調査研究の報告を聴講する。これらを通して、地域の消費者教育推進事業に参加するとともに、実際に大学生や高校生たちが取り組んでいる多様な活動や調査研究を学び、受講生自身の課題研究



に活かしていくことを目指す。

終了後、受講生は「消費生活フェスタに参加して、感じたこと、学んだこと、考えたこと」をレポートの形にまとめて提出する。

## (2) 消費生活フェスタの概要

令和2年度の「学生による消費生活フェスタ」は、2020年11月29日（土）、新町キューブ（青森市）で開催され、橋本都氏（八戸工業大学）の開会挨拶に続き、柿野成美氏（消費者教育支援センター）の講演「エシカル消費で未来をつなごう～コロナの先の暮らしを見据えて～」、ポスター発表（青森西高等学校、青森中央学院大学、八戸工業大学、青森大学、計10点）、活動報告（八戸工業大学、青森中央学院大学、青森大学、計3件）が行われた。坂本遼（弘前大学）が司会を務めた。

## (3) 講義の成果と今後の課題

終了後の受講生のレポートを見ると、柿野氏の講演からフェアトレードやエシカル消費について深く考えるきっかけになった、普段からそれらの問題について考えながら行動したいという内容が多かった。フェアトレードやエシカル消費についてはこの講義の中でも扱っているが（第4回）、大学のキャンパスを離れて、消費者教育の専門家の講演を聴いたことが新たな学びにつながったのかもしれない。また、消費者教育のためにはリスクを避けるための方法を教えるだけでなく、思考力を鍛える必要があるのではないか、消費者問題の範囲があまりにも広いため、カテゴリー化の知識が必要なのではないかといった意見もあった。消費者問題を考えるためには批判的な思考が必要であるから、消費者問題に対しても批判的に考え、その理解を深めながら、取り組みを進めていく必要があるだろう。このように、消費者フォーラムに参加したことは、受講生にとって消費者問題や消費者教育をより深く考えるための動機づけになったものと思われる。

しかしながら、消費生活フェスタでは県内の大学生や高校生たちが消費者教育活動や調査研究の成果を発表したが、この講義の受講生は発表しなかった。他大学の学生や高校生たちは通年でゼミナールの研究やサークル活動に取り組んでいるが、この講義は半期開講の科目の中で消費者教育を行っており、例年11月に開催される消費生活フェスタに合わせて発表を準備することが難しいのである。止むを得ない事情であるが、何かの形で対応できないか可能性を探っていきたい。

## 第10回 研究成果の中間まとめ（2020/12/3（木）福田進治・加藤徳子）

### (1) 講義の目的と概要

第10回の講義は、第7回以降のグループ別課題研究の中間まとめに当たり、附属中学校における模擬授業のための最終調整の機会となる。第8回からの1週間で、受講生は追加的な調査・研究を行ってきた。今回はそれらの結果をそれぞれのグループ内で共有し、

## II 消費者問題講義の実践モデル

意見交換を行いながら、模擬講義で発表できる形に仕上げる。その際、発表の内容が当初の研究テーマに沿って模擬授業が構成されているか、誰が聞いてもわかりやすいものか、とくにそれらの具体的内容と水準が中学生にとって適切かといった点についても検討する。

### (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	附属中学校における模擬授業の趣旨を理解し、今回の到達目標を確認するとともに、当日のスケジュールや注意事項を確認する。	
研究発表ファイルの作成 (30分)	グループに分かれ、模擬授業の構成と内容について最終確認を行いながら、パワーポイントを用いて研究発表ファイルを作成する。	グループに分かれて作業を行う。
グループAの発表と検討 (20分)	グループAが模擬授業の内容（研究テーマ「食生活から持続可能な社会へ」）について発表し、意見交換・質疑応答を行いながら、最終調整を行う。	パワーポイントを用いて発表する。
グループBの発表と検討 (20分)	グループBが模擬授業の内容（研究テーマ「ファストファッション」）について発表し、意見交換・質疑応答を行いながら、最終調整を行う。	パワーポイントを用いて発表する。
コメント作成 (10分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

第8回の講義で、グループごとに模擬講義の構成と具体的内容を確定することができていたので、その後の1週間で、受講生は手際よく追加的な調査・研究を行い、それらをオンライン上で共有しながら、準備を進めることができた。このため、今回の講義では、それまで不十分だった点を補いながら、比較的スムーズに研究発表ファイルを作成することができた。ただし、複数人で1つのファイルを作成すると統一感がなくなるので、各グループで1人の受講生が作成を担当した。その甲斐あって、発表の資料は大変見やすくまとまったものになっていた。しかし、依然として不十分な箇所が残されていたため、模擬講義の当日まで、さらなる調整が必要となった。

グループ別課題研究は少人数のグループワークであるため、受講生はさまざまな役割を分担しなければならなかったが、どの受講生も責任感をもって取り組むことができたように思われる。受講後のコメントからも、受講生のグループワークに対する積極的・意欲的な姿勢が窺える。

## 第 11 回 附属中学校訪問

(2020/12/8 (火) 福田進治・保田宗良・加賀恵子・加藤徳子)

### (1) 講義の目的と概要

第 11 回の講義として、第 7 回以降のグループ別課題研究の成果をまとめ、弘前大学教育学部附属中学校の中学生を対象に模擬授業を実施する。そこで、受講生は（恐らくは生涯で初めて）実際に消費者教育活動を経験し、自分たちの研究成果を自分たちよりも若い世代の中学生に向けて発表することを通して、若い世代同士でコミュニケーションを深める力を養うとともに、課題研究の内容を推敲するためのきっかけとする。

なお、この模擬授業は弘前大学教育学部中学校コース家庭科専修所属学生の教育実習の枠の中で、同学生と協力しながら実施するものである。中学生は教育学部学生の指導の下、計 10 時間の授業の中で、日本や地域の生活文化に着目し、先人の生活の工夫を自分の生活につなげることを通して「持続可能な社会の実現」について考える。その最終回で、消費者問題講義の受講生による研究発表を聴き、「持続可能な社会の実現」についてより深く考える。

終了後、受講生は「附属中学校で模擬授業を実施して、感じたこと、学んだこと、考えたこと」をレポートの形にまとめて提出する。

### (2) 模擬授業の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10 分)	教育学部学生の指導の下、中学生がこれまでの「持続可能な社会の実現」に関する授業の内容を振り返る。	教育学部学生が進行する。
グローバル市民に関する授業 (20 分)	教育学部学生の指導の下、これまでに行った武家屋敷の見学やグループワークなどの内容を踏まえて、グローバル市民になるために必要なことについて、中学生が主体的に考える。	教育学部学生が進行する。
食生活の問題に関する研究発表 (20 分)	消費者問題講義受講生グループ A が「食生活から持続可能な社会へ」というテーマで、食肉の生産と地球温暖化の関係に関する研究成果を発表し、中学生と対話しながら、持続可能な社会を実現するための食生活のあり方について考える。	消費者問題講義受講生がパワーポイントを用いて発表する。
休憩		
ファストファッションに関する研究発表 (20 分)	消費者問題講義受講生グループ B が「ファストファッション」というテーマで、ファストファッションの途上国の生産現場の問題や大量廃棄の問題に関する研究成果を発表し、中学生と対話しながら、衣料品の大量廃棄を減らすためにできることを考える。	消費者問題講義受講生がパワーポイントを用いて発表する。

## II 消費者問題講義の実践モデル

SDGs に関する授業 (20分)	教育学部学生が「持続可能な開発目標」(SDGs)について概説した後、これまでの授業や消費者問題講義受講生の研究発表を踏まえて、自分のライフスタイルを見直し、SDGsの達成のためにできることを考える。	教育学部学生が進行する。
最終まとめ (10分)	教育学部学生がこれまでの「持続可能な社会の実現」に関する授業の成果をまとめる。	教育学部学生が進行する。

### (3) 講義の成果と今後の課題

これまで受講生は今回の模擬授業の準備に真摯に取り組んでおり、その甲斐あって、短い時間の中で研究成果をまとめ、分かりやすい研究発表ファイルを作成し、当日も中学生と巧みにコミュニケーションを取りながら研究発表を行った。終了後の受講生のレポートを見ると、中学生に向けて研究発表を行うために、苦労した、工夫したといったコメントとともに、中学生の積極的な姿勢や予期しない意見に感心した、学びになったというコメントが目立った。これらより、今回の模擬授業が受講生にとって、苦労もあったが、貴重な経験になったことは間違いない。

ただし、今回の模擬授業は教育学部の実習授業の予定に合わせる必要があったため、この講義の本来の開講曜日・時間とは別の曜日・時間帯に実施した。このため、研究発表を準備に真摯に取り組みながらも模擬授業に参加できない受講生が複数いた。別の曜日・時間帯では、受講生にも別の講義や別の都合があることは避けられない。大変残念なことであるが、正規のカリキュラムの中で消費者教育を実践する際の制約から不可避免的に生じる問題である。それでも、当日参加できない受講生も前向きに取り組んでくれたように思われ、十分に学びになったのではないかとと思われる。

なお、今回の模擬授業では、とくに消費者問題講義の受講生の研究発表について、中学生から感想やコメントを収集しなかった。これらを収集していれば、今回の模擬授業の評価のためにも今後の取り組みのためにも貴重な資料になったと思われる。今後、同様の機会があったときには、授業時間中に時間を確保し、受講生にアンケートの回答を依頼するなどの工夫を行うことが望ましいかもしれない。

## 第12回 研究課題の推敲(1)(2020/12/17(木) 福田進治・加藤徳子)

### (1) 講義の目的と概要

前回は、それまでのグループ別課題研究の成果をまとめ、弘前大学教育学部附属中学校の中学生を対象に模擬授業を実施した。受講生は真摯に取り組んだが、思い通りにできなかった部分も少なからずあったものと思われる。今後は、模擬授業の反省を活かしながら、課題研究の内容を深め、ブラッシュアップし、より十分な形で研究成果をまとめていく。最終的に、地域における消費者教育活動の実践として、消費者フォーラムにおいて発表することを目指す。



第12回の講義では、附属中学校における模擬授業を振り返り、当日の研究発表の成果と課題を整理し、今後の課題研究のブラッシュアップの方向性を確定する。そのためにグループごとに研究発表の内容を振り返り、受講生同士で意見交換を行うとともに、担当教員の意見を踏まえて、不十分だった点や改善すべき点をまとめ、研究内容に関わって再検討・再調査すべき点を確認し、今後の作業の方向性について確定する。

## (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	グループ別研究課題の推敲の必要性和進め方を理解し、今回の到達目標と今後の予定を確認する。	
模擬授業の振り返り (30分)	グループごとに模擬授業の内容を振り返り、メンバーの感想とともに、成果と課題、良かった点と良くなかった点を発表するとともに、教室全体で意見交換を行う。	教室全体で意見交換を行う。
課題推敲に関する説明 (20分)	担当教員の意見を聞きながら、模擬授業の内容を再検討し、当日の研究発表の不十分だった点や改善すべき点を理解する。	担当教員がパワーポイントを用いて説明する。
今後の作業の確認 (20分)	グループに分かれ、研究課題のブラッシュアップの方向性を確定するとともに、再検討・再調査すべき点を確認し、今後の作業の具体的手順と役割分担について確認する。	グループに分かれて確認する。
コメント作成 (10分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。	

## (3) 講義の成果と今後の課題

受講生は附属中学校の模擬講義において、中学生と巧みにコミュニケーションを取り、中学生の反応も良かったことから、手ごたえや達成感を感じたようであった。しかし、初めての経験で、思い通りにできたことと思い通りにできなかったことがあるのは当然であろう。受講生同士の意見交換と担当教員の意見から、研究テーマについて別の観点があることや研究内容の説明に不十分な点があったことなどを理解することができたものと思われる。とくに、(肉食の問題について) 断定的に結論を提示するのではなく、もう少し選択的な形で提示すべきという点は重要であろう。

今回の議論を踏まえて、各グループの課題研究について、各メンバーが再検討・再調査を進めていくことを期待したい。

### 第13回 研究課題の推敲(2) (2020/12/24(木) 福田進治・加藤徳子)

#### (1) 講義の目的と概要

前回に引き続き、附属中学校の模擬授業の内容をブラッシュアップし、消費者フォーラムで研究成果を発表するための準備を行う。前回の講義で、受講生はブラッシュアップの方向性を確定し、それらに基づき、研究課題の再検討・再調査を進めてきた。今後はそれらを材料にして、どのようにして研究発表を組み立てていくかを検討することになる。

第13回の講義では、グループに分かれて、各メンバーの調査・研究の結果をそれぞれのグループ内で共有し、意見交換を行いながら、課題研究の内容と構成について再検討し、追加・修正すべき箇所を具体的に確定する。その上で、グループごとに研究内容と構成の追加・修正の方針について発表し、教室全体で意見交換を行いながら、今後の作業の詳細について確定する。

#### (2) 講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	グループ別研究課題の推敲の必要性和進め方を理解し、今回の到達目標と今後の予定を確認する。	
研究内容と構成の再検討 (40分)	グループに分かれ、各メンバーの調査・研究の結果を順次発表し、グループ内で意見交換を行いながら、研究内容と構成について再検討し、追加・修正すべき箇所を確定する。	グループに分かれて作業を行う。
課題推敲に関する経過発表 (20分)	グループごとに、研究内容と構成、その追加・修正の方針について発表し、教室全体で意見交換・質疑応答を行う。これらを通して、研究内容と構成について理解を深める。	教室全体でディスカッションを行う。
今後の作業の確認 (10分)	再度、グループに分かれて、教室全体の意見交換を踏まえて、研究内容と構成について再検討し、今後の作業と役割分担、次回の講義までに各自で行う作業について確認する。	グループに分かれて確認する。
コメント作成 (10分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。	

#### (3) 講義の成果と今後の課題

受講生の中では消費者フォーラムにおける研究発表のイメージは完成しつつあるように思われる。しかし、附属中学校の模擬授業より発表時間が短くなることや、聞き手が中学生でなく、一般市民や大学生が中心になることから、研究発表ファイルをどのように修正すればよいか、どの部分を削ればよいかと悩む様子もうかがえた。他方、発表時間が短いので、発表の内容には入れないものの、研究課題についてより深く調査・研究しようと

する姿勢も見られた。

さらに、今回の消費者フォーラムでは、この講義の受講生の研究発表は「附属中学校における実践報告」という形で行うこととなった。研究課題に取り組むことには違いないが、先の附属中学校の模擬講義の実践報告という要素を入れることは当初の予定にはなかったことであるため、受講生にとっては追加的な負担となった。

## 第14回 研究成果の最終まとめ（2021/1/21（木）福田進治・加藤徳子）

### （1）講義の目的と概要

第14回の講義は、第7回以降のグループ別課題研究の最終まとめに当たり、消費者フォーラムにおける研究発表のための最終調整の機会となる。前回の講義から冬休みを挟んで、受講生は研究課題の内容と構成について再検討しながら、研究発表ファイルの追加・修正のための準備を進めてきた。今回はそれらの結果をそれぞれのグループ内で共有し、意見交換を行いながら、研究発表ファイルを完成させ、最終的な調整を行う。消費者フォーラムの研究発表は、附属中学校の模擬授業と異なって、聞き手が一般の方と大学生が中心になり、発表時間も短くなる。これらの条件の変化にも対応しなければならない。

講義の最後に、消費者問題講義全体の教育効果を分析するために、本学の授業評価アンケート、消費者問題講義アンケート、事後アンケートを実施し、受講生に回答を依頼する。

### （2）講義の内容とその進行

	内 容	備 考
趣旨説明 (10分)	消費者フォーラムにおける研究発表の趣旨を理解し、今回の到達目標を確認するとともに、当日のスケジュールや注意事項を確認する。	
研究発表ファイルの作成 (20分)	グループに分かれ、研究発表の構成と内容について最終確認を行いながら、パワーポイントを用いて研究発表ファイルを作成する。	グループに分かれて作業を行う。
グループAの発表と検討 (20分)	グループAが課題研究の内容（研究テーマ「食生活から持続可能な社会へ」）について発表し、意見交換・質疑応答を行いながら、最終調整を行う。	パワーポイントを用いて発表する。
グループBの発表と検討 (20分)	グループBが課題研究の内容（研究テーマ「ファストファッションの大きな代償」）について発表し、意見交換・質疑応答を行いながら、最終調整を行う。	パワーポイントを用いて発表する。
コメント作成とアンケート調査 (20分)	講義の内容を踏まえて、コメントを作成する。最後に大学の授業評価アンケート、消費者問題講義アンケート、事後アンケートに回答する。	

### (3) 講義の成果と今後の課題

冬休みを挟んで、どちらのグループも十分に準備ができていた。附属中学校の模擬授業の際に不十分だった部分を補ったり、中学生の発言や反応を冷静に分析し、発表内容に加えたりして、研究発表ファイルと発表原稿をほぼ完成させていた。このため、今回の講義では、簡単な打合せの後、それぞれのグループが模擬発表を行い、最終的な微調整を行うことで事足りた。

研究発表の内容については、2グループの間で解釈の違いがあった。グループAは「附属中学校における実践報告」という形を重視し、研究発表の部分を最小限に抑え、授業実践の前提や成果について多くの時間を割いていた。逆に、グループBは授業実践の話題を最小限に抑え、研究発表自体に多くの時間を割いていた。グループAには研究発表の部分をもう少し前面に出すよう修正を求めたが、本番直前ということもあり、十分に修正することができなかった。

## 第15回 消費者フォーラム参加

(2021/1/23 (土) 福田進治・保田宗良・加賀恵子・加藤徳子)

### (1) 講義の目的と概要

第15回の講義として、第7回以降のグループ別課題研究の最終的な成果をまとめ、「消費者フォーラム in HIROSAKI」(弘前大学人文社会科学部・弘前大学教育学部・青森県消費者協会主催)において研究発表を行う。

消費者フォーラムは、弘前大学において、弘前市と周辺地域の消費者教育のための拠点づくりの一環として毎年開催されており、消費者問題の研究者や専門家の講演などが行われ、本学の大学生や地域の高校教員・高校生や消費者教育の関係者などが参加し、交流を深める場となっている。また、この講義の受講生や他学部・他大学の学生が、消費者問題に関する研究や取り組みの成果を発表している。

そこで、本年度も、この講義の受講生は最終回の取り組みとして、消費者フォーラムに参加するとともに、研究発表を行うこととする。これらを通して、受講生は地域における消費者教育活動を経験するとともに、課題研究の最終的な成果を地域に還元することを目指す。同時に、受講生自身も消費者市民社会の形成という課題に主体的な意識をもって取り組むことができるようになることを目指す。

終了後、受講生はこの講義全体の最終課題として、消費者フォーラムへの参加を踏まえて、「地域における消費者教育推進のための取り組み」について検討し、レポートの形にまとめて提出する。

### (2) 消費者フォーラムの概要

本年度の「消費者フォーラム in HIROSAKI」は、2021年1月23日(土)、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールで開催され、飯島裕胤氏(弘前大学人文社会科学部長)



と佐藤貴大氏（文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課課長補佐）の開会挨拶に続き、松葉口玲子氏（横浜国立大学）の基調講演「持続可能な社会に向けた消費者教育」、附属中学校における実践報告（専門教育の消費者問題講義の受講生、弘前大学教育学部の学生、計3件）、大学生の成果発表（弘前大学教育学部の学生、青森中央学院大学経営法学部の学生、計4件）が行われ、西村隆男氏（消費者教育推進委員会委員長、横浜国立大学名誉教授）がこれらを講評し、最後に三澤英治氏（特定非営利活動法人青森県消費者協会常務理事）が閉会挨拶を行った。ただし、佐藤氏、松葉口氏、西村氏は、新型コロナウイルスの全国的な感染拡大の状況を考慮し、オンラインによる登壇となった。

このうち、附属中学校における実践報告の中で、この講義の受講生のグループAが「食生活から持続可能な社会へ」というテーマで、食肉の生産と地球温暖化の関係に関する研究成果を発表し、グループBが「ファストファッションの大きな代償」というテーマで、ファストファッションの途上国の生産現場の問題や大量廃棄の問題に関する研究成果を発表した。これらはいずれも先の附属中学校における模擬授業の報告という形で、当日の中学生の様子や中学生との対話の内容を盛り込んで行なった（詳細は第三部を参照）。

### (3) 講義の成果と今後の課題

受講生にとって、この講義のような消費者問題を学ぶ講義を受講することも、今回のような消費者問題のイベントに参加することも、そのイベントで研究発表を行うことも初めての経験だったが、十分に積極的に取り組み、短い時間の中で内容の濃い研究発表を行うことができた。受講生は「附属中学校における実践報告」という難しい形で発表したが、その形に見事に対応していた。

当日の参加者でもあった教養教育の消費者問題講義の受講生のコメントを見ると、同じ大学生なのに、消費者問題を学ぶだけでなく、中学生に教えていることに感心したというものが目立ったが、その他にも、研究発表の内容自体についても、食品をめぐる問題やファストファッションの問題について勉強になったというものが多かった。この講義の受講生のコメントにも、あらためて消費行動を考えるきっかけになったというものや、自分たちの研究発表を外部の方々に聞いてもらうのは新鮮だったというものなどがあつた。このように、消費者フォーラムにおける研究発表は、来場者や視聴者にとっても、受講生自身にとっても大きな学びになったものと思われる。

とはいえ、正規の開講日でない日程で活動する必要があることや、少人数で研究課題に取り組まなければならないことなど、受講生にとってこの講義を受講することの負担はかなり大きかったと思われる。また、この講義は教養教育の消費者問題を受講するなど、消費者問題をある程度学んできた大学生が受講することを想定して内容を構成しているが、実態は必ずしもそうっていない。さらに、消費者問題の取り組みにおいて、学部間の連携が望ましいことは言うまでもないが、今回のように教育実践の報告という形で報告することが追加的な負担になっているかもしれない。こうした点を踏まえて、この講義のあり方や進め方について、今後とも慎重に検討し、改善を積み重ねていきたい。

## II 消費者問題講義の実践モデル



加藤徳子氏（第6回講義）



最終調整（第14回講義）